



認知症看護認定看護師の 取り組みを紹介します

2015年の厚生労働省の発表によると、認知症を患う人の数は2025年には700万人を超えるとされています。認知症は特別な人に起こる出来事ではなく、年をとればだれにでも起こりうる身近な病気だといえます。

私たち認知症看護認定看護師は、認知症の症状がある人が入院しても、本人や家族が安心してもらえるように、本人や病院スタッフの支援を行っています。

本人への支援としては、入院による環境変化などから、日中・夜間になかなか落ち着いて過ごすことができない患者さんが少しでも生活リズムを整えることができるように、院内で行うデイケアに取り組んでいます。懐かしの音楽をみんなで一緒に歌うことや、ちぎり絵や貼り絵などの身体機能を刺激するレクリエーションを行うことで、リズムを整えて入院生活をスムーズに送ることができるように手伝っています。

病院スタッフへの支援としては、神経内科の医師や地域連携室の担当者など多職種で連携をとりながら、チームアプローチを行っています。患者さんの容態をとらえて適切な対応を考えることができるように、週1回の病棟巡回を通じて、専門的な知識や看護技術を提供しています。また、定期的にスタッフに対し院内研修会を開催し、患者さんに関わる際に大切な視点やより良い接し方などを伝えることで、病院全体の認知症ケアの質の向上を目指しています。

今後も、患者さんや家族のためにスタッフ一同、日々取り組んでいきます。



碧南の歴史へのいざない

問合せ 文化財課内市史資料調査室 ☎(41)4566

No. 41 今と形は変われど、昔から 学校で使われている携帯文具

市が所蔵している「民俗資料」を紹介します。

下の3枚の写真を左から順にご覧ください。

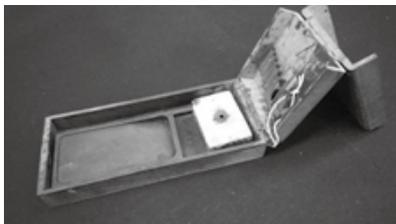
まず1つめは習字用具です。片開きの木箱のなかには、すずりと筆と陶器製の水差しが入っています。

2つめは水彩用具です。絵の具（7色）、絵筆、キャップ、金属製の水入れがあり、仕切り板をはずした木箱の底には、二つ折りのパレットが収納されています。

3つめは解剖用具です。ピンセット、ルーペ、針（柄付き）、まち針が入っています。

昭和初期のものと思われるが、小さい木箱に用具がコンパクトに納められていて、それぞれが片手だけで簡単に持てる位の大きさになっています。この3つの道具は、形を変えて小学校から活用され続け、今の子どもたちも愛用しています。

現在、藤井達吉現代美術館地下1階情報コーナーでは、「碧南の小学校の昔」と題して、昔の学校にまつわる資料を展示しています。是非ご覧ください。
※展示は平成30年1月28日(日)までです。



△習字用具



△水彩用具



△解剖用具